2015年11月７日

全体討論

パネラー：川本　芳昭
田中　史生
司会：高久　健二

高久：時間となりましたので、討論を始めさせていただきます。

まず、本日基調講演をしていただきました川本先生と田中先生から補足的な説明をしていただきたいと思います。先ほどの休み時間に質問用紙を回収させていただきました。そのへんも踏まえまして補足説明をお願いしたいと思います。

まず、川本先生いかがでしょうか。

川本：いま質問用紙をいただいたばかりで、まだ質問を十分に把握できていないところもありますが、外国人留学生に関して一種の人質としての性格を有していたということで、人質と同時に、諜報員としての性格ももっているということも申し上げましたが、もしそうであれば、日本人の留学生の阿倍仲麻呂が、唐の玄宗政権の中で官僚として活躍できたのはどう解釈したらよいのかというご質問をいただいております。

政治的意味合いや文化的な意味合い、あるいは玄宗と阿倍仲麻呂との個人的な関係も含め、強弱はあろうかと思いますが、さまざまな要因があるなかで、留学生の問題が文化的な問題であるといった点で盛んに論じられています。私の今回の話は、また別の一面もあるんだということお話ししてみようとしたもので、阿倍仲麻呂と玄宗との個人的なつながり、あるいは玄宗がまだ皇帝になる前のころからのつながり、あるいは在唐何十年の中で、中国人あるいはときの政権とのさまざまなつながりで活躍したということと、私の話自体はそう抵触するものではないと、十分に両立するものだと思っております。

これがお答えになるかどうかわかりませんが、そういうご質問に対してこのようにお答えしておきたいと思います。

それから、中華と周縁で政治の治め方の影響を、力関係、連携と外交という交渉の姿で表すのかというご質問をいただきました。ご質問の意味合いが少しわからないところがありますが、これも先ほどの人質と同じような回答になろうかと思います。

私自身は考証史学を主に研究しておりますが、ある意味、今回の「中心と周縁」は理論的なシンポジウムになろうかと思いましたので、自分なりにそういう方向に論を組み立ててお話をしたわけでございますが、私自身は中華、あるいは周辺ということを当初それほど明確に考えていた

わけではなく、いろいろな実証論文を組み上げていきますと、どうもこういうかっこうに収まるのではないかと思いましたので、このシンポジウム向けにお話をいたしました。ですから、そういうことでいえば、今日的な意味とは違うかもしれませんが、「外交」というカッコ付きの意味合いでまとめてまいりましたところ、こういうかたちにもなるのかなということでお話をいたしました。

それから、権力の影響をどのあたりまで周辺というかたちで把握するのか、要素とするのかというご質問ですが、どこまでを「周辺」といい、どこまでを「中心」というのかというのは、個々の場合でもあまり固定的なものではないと思います。今回シンポジウムをお受けする前に、枠にはめて話していいのかどうかということを、その概念規定自体を議論しなければいけないのではないかということをコーディネーターの先生にお話いたしました。ですから、どこまでを「周辺」とするのか、しないのかということではなく、現在研究者の中で、ある程度自己裁量ということではありませんが、いろいろな研究の積み重ねの中でこれは「周辺」だとか、あるいは「中心」だとかいっても、その言葉自体はお互いにきちんと了解されることなく論じられているような感じがするということも本日申し述べたところでございます。

それから、「圏外」という用語設定についてのご質問がありましたが、これはたしか柄谷行人さんの書籍の中の言葉になります。私は彼が言っていることを引用しただけなのですが、彼の研究では、狩猟社会とか、奴隷社会とか、あるいは交換経済とか、そのあたりを全部含めて、その中で仮に資本主義といったものに乗り損なった場合にはすべて、「圏外」として規定されるという立場で述べておられたと思います。そういうことでは、今回はそこのところを、彼がその前後関係でどういうことを言っているのかというのを引用するなかで述べたもので、私自身は「圏外」をどういうふうに考えるかということには特段の意見はございません。

先ほど質問をいただいたばかりですので、十分にお答えになっているかどうかわかりませんが、そういうところでございます。何かありましたらお尋ねください。

高久：ありがとうございます。

続きまして、田中先生はいかがでしょうか。

田中：いろいろ質問をいただいておりますが、ざっくりとしたお答えといいましょうか、補足といいましょうか、私が言いたかった趣旨に沿って説明させていただきたいと思います。

考古学に関する質問をいくつかいただいておりますが、これは専門外でございますので、本来お答えしなければならないのかもしれませんが、今回は保留にさせてください。質問が多いものですから、本日は本報告の趣旨に関する質問についてお答えさせていただければと思います。

頂いた質問には、例えば阿倍比羅夫が日本海を北上していく背景をどう考えるのかというもの、硫黄の問題に関するもの、また琉球というものを隋は高句麗や新羅、百済と並列するものとしてとらえていたのかというものもございました。これらは北や南というものと、日本あるいは東アジアとの関係をどのようにとらえていくのかという、大きくいえばそのような質問だと思います。

まず北でいいますと、関係としては7世紀の半ばから始まるわけではなく、ずっと古く、たし

かこの前のシンポジウムでは馬のことが話題になったと思いますが、馬具の出土についていえば旧東山道ルート沿いに、それこそ土生田さんや亀田（修一）さんが研究されておられますが、5世紀の後半ぐらいから北に広がっていきます。特に岩手県の角塚古墳は有名です。おそらくこういった馬文化の広がりも、北方交易と関わっているんだろうと思っております。

しかしそれでも、倭王権の北方社会との交流に関して、7世紀にあれだけはっきりと、画期的な変化が現れるのは、やはり隋唐の成立の問題が大きかったのだろうと思います。それは南島でも同じです。「琉球は隋から高句麗、新羅、百済と並立する周辺国との認識がなされていたという理解でいいか」というご質問がございましたが、隋は高句麗、新羅、百済に対してとは違い、琉球に対しては没交渉で風俗もよくわかっていませんでした。交流を始めて服属させようと思ったら抵抗するので討ったという話になっております。

隋に関しては、よく北の突厥の話が問題となりますが、高句麗との関係も長く対立的でした。それから東南アジアのほうにも出ていっています。このように隋は、北から南へと陸域だけではなく、海域にも出ていきます。一方、この頃から倭国も、もともと北方交易はあったのですが、非常に大きな緊張感によって、おそらく「北方の交易」という意味を、中国との関係のなかで読み込み始めたのではないかと思います。

これは南も同じだったのだろうと思います。ただし隋唐が南よりも北との関係を重視していたことの影響で、北のほうが対外的な意味としてはより強く意識されていたように思います。南はどちらかというと、琉球などがターゲットになっていくなど、海域に隋が出てくることと関わって南島を気にしていたのではないかと思います。

このようなことから「中心」と「周縁」という問題を考えますと、中心と周縁はどこを主体に置いたときにどう見るかという問題だと思います。私はこれを「地域」から見ているわけです。日本でもなく、中国でもなく地域から見たわけです。例えば北や南という問題を考えたときに、日本からも周縁化されていきますし、あるいは東アジアの中からも周縁化されていったのかもしれませんが、周縁化されていった地域が活動していくときに、日本的なものを取り入れていく、あるいは東アジアの連関のなかでアクションが起きて、彼らが日本と接触をしていくということもあります。そのようにして、例えば喜界島はおそらく最初は大宰府などの日本的な勢力が中心となって、それに地元の人たちが関わって彼らは成長していきました。成長していくと、今度は中央の官僚を飛び超えて様々な関係を結びはじめます。彼らは自律的な動きをして、そして最後には大宰府を追い出してしまっています。

このように日本、あるいは東アジアもそうかもしれませんが、周縁化された地域の自律的な中心の形成があります。そしてそののちの琉球王国をどのように考えていくかという問題も出てくるわけです。北でいえば奥州藤原氏をどういうふうに考えていくかという問題とも関わります。川本先生がお話しされていた理論的なお話の中に、若干それに類した話が出ていたと思いますが、具体的に列島史として見てみると、北と南は中心と周縁が多重に重なっていることに気づきます。そもそも日本は東アジアの中では周縁かもしれませんが、列島の中では中心を王権は目指します。そうすると、日本の地域はある意味、いくつもの周縁ということになり、大宰府は日本王権の周縁といえるかもしれませんが、東アジアから見たときには日本の入口になりますので、中国を中

心にした場合は、大和のほうがむしろ周縁化されていきます。ですから、博多を押さえなければ倭王権はもたないといった問題が出てきます。このように、地域から中心と周縁の関係を見ていきますと、もっと錯綜関係、重層的・多元的な関係が見えてくるのではないかというつもりで、北と南でお話をさせていただいたという次第です。

高久：ありがとうございました。

最後のまとめのようなお話をいただきましたが、これから限られた時間ではございますが、5時まで今日の講演内容を深めていくように討論を進めてまいりたいと思います。

本日のテーマは「古代東ユーラシアにおける『中心』と『周縁』」ということです。最初に飯尾先生から問題提起がありましたように、「中心」、「周縁」、さらにいえばその外側の「辺縁」というものの相対性、あるいは重層性、あるいはその関係を持つ「主体性」というものに視点を当てて考えていくというのが今日のテーマになっております。

最初にご発表いただきました川本先生からは、特に5世紀、6世紀の東アジア古代における「中心」、そしてその「周縁」ということで、その中心と周縁の変容のあり方、さらには留学生を含めた人質問題とその意味ということでお話をいただきました。そしてお2人目の田中先生からは、特に日本列島の7～10世紀という時代を中心として、南と北との交易ということでご発表をいただきました。

この討論では、これをもう少し時代、地域的に広げていって、この議論を相対化していきたいと考えております。

まずは、川本先生の内容を少し広げていきたいと考えております。川本先生のお話は、今回は特に北朝、中国の北側の地域を中心としてお話をされました。それを日本列島の同時代的な状況の話をしていきたいと考えております。特に川本先生のお話にありました人質の問題では、中央に留学するということはいろいろな意味を持っているんだというお話がありました。これは日本列島においても、5、6世紀という時代にはそういうものがあったと思います。おそらく日本もそのように中心というものを目指すという時代があります。ここについて、荒木（敏夫）先生のほうからコメントをいただきたいと思います。

これについては川本先生も論文では書かれておられますが、例えば5、6世紀における「天下」意識ですが、稲荷山古墳から出ました鉄剣銘おける天下治しめす（＝治天下）の問題、あるいはその『宋書』倭国伝に出ております倭の五王の上表文の内容、さらにはこれも鉄剣の銘文に杖刀人、典曹人というかたちで出てくるわけです。これは畿内の王家に仕えていたわけで、おそらく地方の豪族だと思われます。稲荷山鉄剣に「乎獲居臣」というのが出てきますが、これも当初は中央に仕えていた人間で、その後地方に下るということになっております。

そのあたりについて、川本先生のご発表と絡みあわせるかたちでコメントを荒木先生からいただければと思います。

荒木：専修大学の荒木です。

いま、全部言われたことを話すのはなかなか大変ですので、絡ませられる範囲内で、質問と同

時に意見を述べさせていただきたいと思います。

今回、このレジュメを事前に勉強させてもらうつもりであらかじめいただいて読ませていただきましたが、川本先生は相当力が入ったご報告をご用意なさったなというのがわかりましたし、いまお話を伺うと、わざわざ私どもに向けてかなりご用意いただいたということがわかりました。大変感謝いたしております。

その中で、１つは理論的な問題についてはまとめて議論したほうがいいかと思いますが、川本先生がおっしゃられた「質」の問題につきましては、日本史の中でもすでに議論になっております。「質」は和語では「むかはり」といいますが、日朝関係の中でのやり取りでは、これは旧来ではまさに字のとおり、そこの「質」を出す・出さないの関係で、そこには朝鮮との対等外交という観点よりは、『日本書紀』編纂段階では朝鮮を従属国に位置付け、そこに貢上してきたものだとざっくりと理解する傾向が強かったのですが、現在、日朝関係の再検討のなかで、おそらくそうではなく、「質」と書いてあるのはあくまでも倭国側の認識であって、「質」と書いてあるからといって、それが実際的な双方の国と国との関係を示すものではないだろうという、そのような議論の展開が日本史ではされております。

今回、田中先生の報告はどちらかといえば「モノ」を中心として、川本先生は「質」ということで具体的に「人」を出してくださいました。井真成から始まった私たちの全体の研究プロジェクトでは、代表の飯尾先生もされておられましたが、「人の動き」、「モノの動き」の中から考えていこう、そのときに、当然ですがモノの流れの中には、中心から周縁に流れていくモノもあるだろうし、周縁から中心に流れてくるモノもあります。これは政治力学的にいえば、表面では「質」と出てきていても、別の面から見れば、少なくとも私は、そこについてはもう少しニュートラルな言い方で、史料用語を使わずに、「媒介者」という位置付けにして、その媒介には歴史的表現として「質」というものもあり得るだろう、「質」は上位国から見れば、完全に「質」（＝人質）という側面があったとしても、日本側から見ると客観的には質であっても、主観的にはそうではありません。そこは当然のこととしてあり得ることだと思っております。

ただ、「質」の場合であっても、今回は最終局面で留学生の問題を出してくださいました。前の５年間（東アジア世界史研究センター）のシンポジウムの中で新羅の留学生の事例を報告していただきましたが、その中で、新羅は日本と比較して実に大量に、頻繁に留学生が行き来していました。日本の遣唐留学生は限られたわずかな期間の中で、たしかに数は行っているのですが、新羅と比較した場合、比較にならないほど少なく、頻繁に行っているわけでもありませんでした。新羅でも、阿倍仲麻呂のように帰ってこれなかった者もいれば、新羅に帰ってきても新羅に絶望してまた中国に戻るというような事例も出てくるなど、新羅と唐をまたぐ多様な文化を媒介する存在を問題にしてきました。

日本の場合には、中心としての河内、大和といったところに、大王のもとに出仕する――川本先生のレジュメの最後のほうにありますし、日本史で、鈴木（靖民）先生もよく使われますし、私も使う用語ですが、「大王に近侍をする」あるいは「近侍的トモ」という言い方が５世紀代であればたしかです。通常カタカナで「トモ」と書きますが、かつては大和王権に対して劣に置かれていた５世紀の地域地域の有力「豪族」が子弟を送り込みます。これは、どちらかというと強

弱の関係で説明していたのですが、その強弱はあっても、以前のような強調の仕方をせずに、「近侍的トモ」という言い方をし、それも男性だけではなく女性も「ウネメ」、「ユゲヒ」、「トネリ」というかたちでもっていくだろうということです。まさに出仕して、中央の文化を大王に近侍するという政治的従属性をもちながらも、一方で中央の文化をもって帰り、そしてそのもって帰っていったところで、その地域社会がどのような文化的変容を遂げるだろうかということで、ここでいうところの、中心は中心のままあり続けるわけではなく、周縁が周縁のまま、同じ質でもって動くわけではありません。時代によって変化します。そのときに、1つ「中心」と「周縁」のあり様を具体的な中で考えていったらどうだろうかというところでやってきた経緯がございます。

今日、川本先生のご報告をうかがっておりまして、人質の問題もそうですが、レジュメの2枚目のところで、これは中国ではある意味常識なのだと思いますが、「夷狄も帝王たり得る」とあります。そのとおりだと思います。そのとおりだとは思いますが、日本の場合にはこういう発想はほとんど出てきません。「帝王たり得る」というのは、つまり平将門レベルを高く評価すればそうですが、中国社会においては辺境であってもひっくり返り得るということを意味しています。また下の「五徳継承図」でも説明として出てくるのは非常に面白いですが、日本ではなかなかそれが出てきません。そのことが、今日のお話をうかがっていてとても勉強になりました。

ただ、これは田中先生の内容にも引っ掛かってくるのですが、川本先生のところだけで申し上げますと、質の問題については私たちも決して考えていないわけではありません。それは先ほど言ったような、おそらく同じニュアンスで語られていたのだと思います。字義どおりの政治的な上下関係というのは、別の見方をすればこういう見方もできるというご指摘があった、そこのところにつきると思います。周縁が周縁として、中央とどう関わるのかといったときの着眼のポイントは、こういうところにも置かなければならないという、そういうご指摘のとおりではないかと感じた次第です。

そういったところの理論でまいりますと、一番最後のところに出てまいりますが、フリードマンの定義や、日本の場合も、この中でも紹介がありました1つの意見として、初期国家論というスタンスで、岩永（省三）先生や宮本（一夫）先生のところで整理された見方や、日本の考古学者の都出（比呂志）さんの考えも引用されながら言われているわけですが、一方で、これに対比されるかたちとして、5世紀、わりと早い段階ですと、日本の場合にはもう1つ違う理論的な問題がかつてはありました。いまでも、東京の方たちはそういうことを考えている部分があるわけですが、それが「首長制国家」というものです。つまり首長制論というチーフダムという概念を使って5世紀、6世紀、7世紀を説明し、律令国家に1つの国家、典型的な古代国家の成立を見ようという意見があります。

もう1つ、「この律令国家的なものができるもっと前の段階をすでに国家と言ってもよい」という問題提起が出てきまして、この初期国家論という言い方がかつてありました。首長制論のところからそのへんを積極的に展開を図っているのが、あとでお話ししていただく鈴木先生です。

中国史のほうの研究の状況ですが、初期国家論であれ、あるいは首長制論に基づいて解決しようとする人はあまりいないのではないかとも思いますが、近年においてはそのあたりの研究とい

うのはどのあたりまでいっているのでしょうか。このあたりをお伺いできればと思っております。
前置きの説明が長くなってしまって申し訳ございませんでした。具体的な質問は田中先生に対してございますので、それはあとでさせていただければと思います。

高久：川本先生、いかがでしょうか。多岐にわたっておりますが、首長制論のほうにいく予定はなかったのですが、先生は日本のことも論文に書かれておられますので、そのへんも踏まえていかがでしょうか。

川本：いろいろありがとうございました。
ご質問は2つということで、1つは「質」の問題に関してと、それから最後のところに出た初期国家論に関することだろうと思いますが、「質」に関しましては、日朝関係史の中で田中先生もやっておられますが、王子が「質」になる、そのような、いわば単体のといいましょうか、そのようにやられているということは私もある程度は把握しているつもりです。
今回お話ししましたのは、「質」という字があるとかないとか、そういうことではなく、もっと根底的な、特にここでは北アジアのことでお話しさせていただきましたが、そこの中で「質」というかたちで出てくることは滅多にありません。しかし、だんだん首長の権力が部族制を突き破って、専制国家の初期段階に行くとき、そこに自分の官僚をつくり出していきます。そうして生まれた官僚の根底的性格は、「質」というかっこうで、共通項をずっと見ていくことが可能だという、そういうかたちで「質」という言葉を使ったわけです。
今日取り上げたように、「トモ」の場合もある程度そのようなところもあろうかと思います。その「トモ」は、大和王権の場合でも中央に上番して、あとで帰っていき、その文化を伝えたり、あるいは中国周辺の諸国が、中国に使節を派遣し、その人たちが中国の文化を受け容れていくこともあると同時に、北方民族の場合には、そういう人々を主として取り込んで、それを支配階層に組み換えていく、新しい国家をつくり出していく、もともとは部族連合体のような構造にあるわけですが、その部族連合体が王権を中心として、家産国家的なものをつくり上げていこうとするときに、そこにいる首長の息子、あるいは弟といった人たちを自分の官僚として取り込んでいって、その人々に特権を与えていくわけです。与えていきますが、その人々が新しい国家が生まれるということで、そこに積極的に参画していくかたちで国家の次の段階が生まれていくということになります。
それを中心として「質」の話をしましたが、そのことが日本の場合にそのまま適応できるとは思っておりませんし、そういう点では、先ほどの初期国家、首長制国家についての分厚い研究史があるということは外から見ていてもわかっておりますが、中国史の世界の中で、そのあたりが議論されることは殷とか周のあたりではあると思いますが、私がやっているような中世、古代後期では議論されることはほとんどありません。
ただ、先ほども申し上げましたように、そのころの総人口はよくわかりませんが、遊牧騎馬の民族が中国の中に入っていくわけですが、その人々には文字もなければおよそ律令というものも理解しないような人たちで、ただ、騎馬文明ですから軍事力には長けていて、その人々が当時の

中国は貴族制の時代という、そういう点では高度な文明国であるわけで、そういうところの上に乗っかかる形で、国家を形成するわけです。そういうことが、中国の歴史上では何度も起こります。それは元の時代もそうですし、清の時代もそうですが、そういう国家のあり方、あるいは社会のあり方というのをどのようにとらえたらいいのかというのが、私の根本的な問題意識としてあります。

今回はユーラシアということで、立場によっては猛反発を呼ぶ可能性もありますが、中国史全体は中国と北アジアが抗争しながら徐々に多民族的なかっこうで一体化の様相を強めると、それが清の時代の様相であると思います。そういう大きな融合のいちばん初期段階で起きたのが、この五胡十六国から南北朝時代の華北の状況であろうと思います。それが一種の中華帝国だというものだと思います。

その中華帝国の国家のあり方、社会システムのあり方、それから日本における国家形成のあり方から初期国家というのか、首長制国家というのかという問題があるのだと思いますが、そのときに、やはりそこには「中心」と「周縁」という問題が同じ時期に起こることもありますし、何度も同じようなことが起こることもありますので、相互に交渉しながら生じているという点もあろうかと思います。ですから、今回のテーマ自体は、そういう初期国家やあるいは首長制国家とか、その分野分野で研究が行われているものを、もっと東ユーラシアの観点から見たときにはという、その相互の関係性がどうなっているのかということについて、私の一種の実証研究からもってくればこういうことも言えるのではないかという、そういうことで試論というかっこうで挙げたわけです。

先生がお尋ねくださった２つの件に対する、私の現段階の回答はそういうところだと思いますし、それ以上の回答は難しいと思います。

高久：ありがとうございます。

このテーマに関しましては、田中先生もいろいろご研究をされていると思いますので、田中先生のご意見もお伺いできればと思いますが、いかがでしょうか。

田中：川本先生のお話は「質」の問題というよりも、支配体制として実質的な中身を「質」から考えられていたように思います。一方、倭国における「質」は、『三国史記』にも出てくるもので、『日本書紀』だけの問題ではありません。この古代日本の「質」については、例えば中国史との比較でいえば小倉芳彦さんの研究だと思いますが、春秋期の盟約に伴う国際儀礼である「質」にいろいろな種類があり、その中の１つを利用したのではないかということが議論としてされています。しかし、今回の川本さんのお話は、私には質よりも「トネリ」が思い出されました。

５世紀ですと、埼玉県稲荷山古墳出土の鉄剣銘に登場する「杖刀人首」のオワケ臣は北武蔵の豪族の子弟だと思います。こういう人たちが中央に出仕し、王宮に仕えたり、王権の工房に仕えたりする体制が人制です。そこで最新の技術や文化を学び、それを地方に持って帰るので、いろいろな技術の拡散が起こっていきます。先ほどの話であれば、地方の豪族やその子弟を側近にしてやっていって、彼らが中央の知識や技術を学び、帰っていったときに最新のものが広がってい

く構造になっています。こういったものと対応させるほうがいいのではないかと私は思いました。

またこの人制も、中国華北に由来するものが朝鮮半島を経由し倭国に来ているのではないかと考えていますので、このような支配の方法を考えたときに、川本先生が中心にやられている問題は非常に重要だと思います。さらに、人制が出来上がって、王権が求心力をもって技術や文化を分配していくなかで、「治天下大王」という単語も出てきます。それは東アジアの中心である中国からの借り物の言葉ですが、それを倭王権の中心性を表すものとして使っています。こうしたことからいうと、単語や支配体制がそのまま同じではありませんが、川本先生の提起された問題は、倭国でも似た構造を持つ「中心」と「周縁」の問題として探そうと思えば探せるのではないかという気がいたしました。以上です。

高久：最後はまとめていただきましてありがとうございます。

田中先生からは７〜10世紀における南北の交易に関して、実際の「モノ」から見た交流を基軸としてお話しをいただきました。今回のシンポジウムは文献史学からのアプローチを中心に据えておりますので、これに関しましては「モノ」ですから考古学的な知見もあると思います。今回、田中先生は７世紀以降の内容を中心にお話しいただきましたが、考古学ではそれ以前の、６世紀、５世紀、４世紀という時代も「モノ」で議論できるわけです。このへんに関しまして、考古学の土生田（純之）先生から、物質資料から見た７世紀以前の北と南の交流について、時間も押しておりますので、非常に簡単にお願いしたいと思います。

土生田：皆さんが熱心にお話をされておりましたので、もうないだろうと安心しておりましたが、それでもやれと言うのであればお話しします。

先ほどの初期国家の議論になりますと、どうしても順々に領域が広がっていって、畿内化していくという印象をもちやすいのですが、近年の研究では、例えば東北の岩手の中半入遺跡、宮城最奥の入ノ沢遺跡といった大きな遺跡では、いったん鉄器文明になりながら石器に戻っていっています。石器に戻るというと、すごく遅れた社会になりそうに思われるかもしれませんが、江戸時代も火打ち石という石器がちゃんとありますし、石は遅れているという考え方は古い考え方だと思います。

いったん古墳をつくっても、またすぐになくなるといったように、そう単純ではないということを頭に入れておかなければいけないと思います。北海道の文化が南に入っていって、海獣の皮をとって交易に使ったということも確認されています。ですから、単純に発展していくと考えるのはきわめて危険で、もっと実態に即していかなければいけないと思いますし、それができるのは考古学以外にはないと思っておりますので、もっと頑張らなくてはいけないと思っております。

ご質問とは違いますが、田中先生のお話の中で北のほうの話がありましたが、あとの時代もだんだんと大和のほうに組み込まれていくという９世紀、10世紀、11世紀あたりですが、北海道式古墳は従来はわからなかったのですが、近年では下北半島、八戸、順々に古墳が北上していくことがあります。これは当時の近畿はすでに古墳をつくっておりませんから直接関係はありませんが、文化相対としては受け容れていくという、これは先ほどの話を打ち消すようで申し訳ないの

ですが、文化段階がまったく違いますが、そのへんで北海道式古墳というのも、やはり淵源は畿内の古墳であると考えて間違いないと思いますので、これは文化段階が違うということでご承知おきください。この段階は、近畿地方は誰が言っても国家段階です。そういうものの相対として入ってくるということですので、そのへんもあわせてお話させていただきます。

南方については時間がありませんので、やめておきます。

高久：ありがとうございました。

田中先生のご発表では、南方産品と北方産品の性格の違いという非常に興味深いご説明をいただきました。南方産品では貝を中心に取り上げられましたが、貝も研究が多く、朝鮮半島からも５世紀、６世紀の古墳から出てきます。おそらく北部九州の勢力との関係で入るのであろうということで、イモガイという南海産の巻き貝の製品が新羅にかなりの量が入っていきます。また、先ほども写真がございましたが、夜光貝（大加耶）も池山洞44号墳という５世紀終わりごろの古墳から杓がそのまま出ておりますので、朝鮮半島との関係も興味深いところだということです。

先ほど荒木先生が田中先生にもご質問があるというふうにおっしゃっていましたが。

荒木：私がお話しするのではなく、河内（春人）さんがいらっしゃいますので。

高久：では、「治天下」に関してよろしいでしょうか。

河内：ご指名を受けました河内です。

「治天下」についてですが、中国思想における「天下」を古代日本が受容して成立したことは確実です。ただし、その「天下」をどのように理解するかという点は、朝鮮半島を含めるか否かなど人によって考え方が違います。今日の川本先生のお話は、鮮卑が北魏国家をつくり中華になるという、中国社会における異民族の中華化という内容でした。中国の外の異民族が中国に王朝を建国した場合、これまでの研究では「征服王朝」や「浸透国家」などと称してきました。鮮卑にそうした概念が適切かどうか問題はありますが、中国社会に入っていき、その影響を受けながら統治者である異民族が天下＝中国社会を治めることになります。

これに対して、倭国の「天下」は、中国の思想的な影響は受けるけれども、中国社会とは違う、日本古代の社会を「天下」として設定し、そこを「中華」として位置づけていくことになります。その点に鮮卑と倭国の「天下」の作り方の違いがあると思います。もう少し申し上げれば、鮮卑が中華化していく過程というのは、鮮卑が中国社会の下からの圧力を受けながら「中華」になっていく過程である一方、日本の場合には支配者層が「天下」「中華」を意識して、それを下に押し付けていくかたちです。そのため倭国の民衆が自分たちを「中華」として意識することは、かなり希薄だったのではないかと思います。お話を伺って、そうした違いに気を付けていくことが必要だと思いました。

感想になりましたが、どうもありがとうございました。

高久：ありがとうございます。川本先生、いかがでしょうか。

川本：「治天下」についてははじめのところで述べましたが、西嶋（定生）先生等がこの「治天下」を取り上げるときに私が申し上げたのは、自主的な「天下」としては、日本列島だけではなく、『宋書』倭国伝の中に出てきている「六国諸軍事」という南朝鮮の領域をも含むような地域を、当時の日本は「天下」だと考えていただろうと思われます。それを実質的に支配していたとか、支配していないということとは異なり、理念的には、実質的な面としてはそう思っていただろうということです。もともと「天下」というのは、先ほどの河内さんのお話にもありましたが、中国伝来のものですが、そういうことから現実的に考えますと、日本列島、あるいは朝鮮半島の南のほうということだったのかもしれませんが、理念的には日本を中心とした天下、「あめのした」ということで想定していただろうという二段構えで、西嶋先生とは違うということを昔申し上げたことがございます。

日本の「天下」と中国の「天下」のあり方の相違というのは、先ほどお話があったとおりであろうかと思います。ただ、北魏や北朝の話をしましたが、ここで話をしようと思ったのは、両者が非常に似たところを持ち、それは単純に似ているだけの問題ではなくかなり構造的なものがあるけれども、相当大きな違いもありますので、そういった類似と相違を「中心」と「周縁」の中でどのように理論付ければいいのかについて今日はお話しするつもりでした。

高久：これに関して田中先生、いかがでしょうか。

田中：私は私で「天下」を考えていまして、朝鮮半島のことを考えなければならないと思っております。牟頭婁墓誌にも「天下」は出てきまして、非常に朝鮮半島との交流は密ですし、あの段階で高句麗が「天下」を称し始めているということ、それから倭国が高句麗を非常に意識しているということを考えると、朝鮮半島の問題も同時に考えながら「天下」の成立を考えなければいけないのではないかと思っております。以上です。

高久：ありがとうございます。

朝鮮半島、特に高句麗とその後を継ぐ新羅の「天下」感も非常に重要になってくるということだと思います。

５時を回ってしまいました。まとまりがつきませんが、最後に会場に鈴木靖民先生がいらっしゃっていますので、今日の講演とこの討論の内容を踏まえまして、最後に総括的なコメントをいただければと思います。よろしくお願いいたします。

（フロア）鈴木：川本先生のほうは後回しにしまして、田中さんの報告は私と共通するところが多いので先にコメントさせていただきます。私の基本的な考え方については田中さんが参考文献で引用してくださっている、昨年出版した『日本古代の周縁史』の終章にいろいろと考え付いたことを書いておきました。

ひとことで言いますと、「中心」と「周縁」の、特に「周縁」というのは自然発生的なものではなく、国家ができることによりつくり上げたものだということです。そして上下関係でいえば、中心である国家、公権力等が上位に立ちやすいというものです。当然、「周縁」の側の反発、反作用（リアクション）もあります。そこまでにとどめておきたいと思います。

川本先生が取りあげてくださった、私の東ユーラシア論研究のきっかけになったのは、古代東ユーラシア研究センターの前の東アジア世界史研究センターの飯尾（秀幸）先生の発言に刺激されまして、たしかその後に発表させられたものだったと思います。ですから、専修大学のシンポジウムには恩義があるわけですが、その後私も昨年金子（修一）先生と編集しました『梁職貢図と東部ユーラシア世界』のほうでもう少し進化したかたちで考えを述べました。そしてさらに先月、中国の杭州で開かれたシルクロードの国際シンポジウムに呼ばれて、そこで日本の研究状況を中心にお話をしました。シルクロードがテーマでしたから、私は東ユーラシアと同じような意味でとらえ、報告をしました。もちろん、専修大学のプロジェクトの宣伝もしましたし、数年前にやられました、「海のシルクロード」も紹介させていただきました。

そこにはヨーロッパや、驚いたことにシリアの研究者も来ていました。その発表の中に「シルクロード」あるいは「東ユーラシア」につながる概念に関して、シルクロードのバイキングということでイギリスの考古学が盛んなヨーク大学のジュリアン・リチャード先生が発表されたのですが、それには北ヨーロッパからスカンジナビア半島までを対象にしておられました。日本からは敦煌学の高田時雄先生が発表されましたし、韓国の馬島沖で高麗時代の沈没船が最近見つかりましたが、その陶磁器の墨書について考古美術の李明玉さんからの発表がありました。

中心に対する周縁を広げていったら東ユーラシアは広がりがあるということになります。それから逆に田中さんの報告での、日本列島を中心に日本列島の北と南の地域で考えるとこうなるというように、私も中心と周縁を固定的なものとはまったく考えておりませんで、非常にフレキシブルで、可変性のある、動きやすい、変わりやすい性格をもった「中心」があります。それから私は「周縁」を２つに分けて、いろいろな意味で中心とくっついている「周辺」と離れている「辺縁」とがあると考えるのです。「周縁」が中心になることもあるということが特徴です。今日もある程度そのようなお考えが発言の中にあったかと思います。

田中さんの報告についてですが、遠距離間の連鎖性ということもすでに中国の歴史学ではかなり前から陳寅恪などが言われていますので、それである程度説明がつくのではないかと思います。東京学芸大学の日高慎さんが、北海道余市の大川遺跡から出た５世紀初めの続縄文期のペンダントに使っているものは、もともとは中国東北、つまり燕ないしは朝鮮半島のどこかの地域で使われた、馬具の轡の部分を改造したものだという発表をされています（『東国古墳時代の文化と交流』）。それは伝播のスピードとともに大変興味深いと思います。

同じようなことを考えている方に、馬の考古学をやっておられる福岡大学の桃崎祐輔さんがいます。彼も早くから日本に上陸した馬の文化、馬具の文化が九州から北海道までリアルタイムに伝わっていると述べておられ、それも大変興味深く、その実態をもっと具体的に論ずるべきだと思っております。

それから最後に川本先生の報告についてです。３点ほど感じたことをお話しして、まとめたい

と思いますが、１つ目は荒木先生がおっしゃられたように、日本史でいえばやはり「トモ」「トネリ」ではないか、あるいは「○○人」という倭王に奉仕する人ではないかと思いました。ひとことで言うと東アジアでは、どの時代でも中国の文字でいうところの「部」で共通するのだろうと思います。そして、その本質は何かということも、検討しなければいけませんが、血縁を主体とするものといってもいいのかどうかだと思います。川本先生からお返事をいただく時間はないでしょうが、私はそれだけでなく地縁もあるのではないかと思っております。

２つ目は、政治も専業と考えますと、専業集団あるいは職能集団という性格が強いのではないかと思います。私は日本史をイメージしているので違っているかもしれませんが、それが発展すると政治組織になるという図式を描くことが東アジアサイズでいえるかどうかです。

私も文化の伝播、あるいは人の移動の系譜でいえば、北朝系の文化と南朝系の文化が、朝鮮半島や日本列島へ伝播することを考えると、山東あたりで、中国の研究者の言葉になりますが、「文化合流」を遂げるのではないかと考えています。もちろん高句麗等に行く場合もありますし、南朝からストレートにのちにいう百済のほうに船で行くこともできるわけですが、そこから日本を考えますと、文化合流した仏教などが百済なり日本列島なりに伝わってくるのが主な流れではないかと思います。実は「部」もそうです。これも北朝の、もとは北周などの政治集団や政治組織かもしれませんが、北周や北斉を介して百済、そして倭へ受容され変化しながら制度化したということで理解できるのではないかと思います。

３つ目ですが、結局、東アジア論あるいは東ユーラシア論として、田中さんは「周辺」のお話でしたが、川本先生は「中心」のお話をされました。中心の人間集団に求心性があるのは当然として、では、それらは「周縁」を含む世界であり、その社会、あるいは集団の歴史のどういうものが何かを動かすのか、あるいはそのポテンシャルがあるとすればそれは何なのかを考えてみました。このプロジェクトのメンバーに中国の葛継勇さんがおられますが、この間、彼とメールのやり取りをしていまして、彼は東ユーラシアの共通点がなければマズイのではないかと言いました。東ユーラシアの中心と周縁とを結ぶもの、あるいは中継するものとして交易、「モノ」の移動はいけると思います。しかし、私はもう１つは、仏教ではないかと考えました。そうしたところ、葛さんは仏教の場合、東のほうは説明ができても中央アジアは説明できないのではないかと言いますが、インドから発祥して世界に伝わるわけですし、仏教は内容が幅広くいろいろあるのでこれでいけるのではないかと思っています。とくに仏教はその土地土地で土着化するというか、土地の宗教や信仰と融合します。

しかし、経済的なことと宗教や思想的なことだけで説明できるのかということも、なお今後、研究すべき検討課題だと思っております。

３つ目のところは川本先生に対する批判ではまったくなく、「中心」とは何かという１つのアプローチであり、私の考え付かなかったことなど大変勉強になりました。

最後に、中国では社会科学院に最近、辺彊史研究所ができました。以前は同じ名前の研究中心でした。それから、2011年に私が北京大学に招かれて滞在したときに、いろいろな研究者から教えられて知った、中国での大きな歴史学の課題は「国家認同」そして「民族認同」という問題です。「認同」とはアイデンティティのことです。つまり、国家のアイデンティティと民族のアイ

デンティティで、この場合の民族は、川本先生が言っておられたように、中国内部の辺境でもかまいませんが、きょうのテーマのように外側でもいいわけです。今日的にいえば民族問題です。そういうものを歴史学的にどのように解決していくかということは、中国の歴史学界における大きな課題です。

日本ではそういう問題に対する対応は北海道や琉球の一部の歴史家を除くとほとんどなされていないと思いますので、専修大学の力量であれば絶対にできるはずですから、ぜひ、そういうことをも今後取組んでいただきたいと思います。

高久：ありがとうございました。

おそらく川本先生の「部」に関しては、コメントされたいと思いますが、時間の関係で申し訳ありません。

鈴木先生からはいろいろな課題をおおせつかりました。これからそのあたりを少しずつ解明していきたいと考えております。

時間も大幅にオーバーしてしまいました。今日の内容につきましては、年度末にセンターが発行します『年報』に成果を出していきたいと考えておりますので、そちらのほうを見ていただければと思います。

本日は長時間にわたり、お付き合いいただきましてありがとうございました。今後もこのようなかたちで、来年度もさらにシンポジウムのほうを進めてまいりたいと思います。また、ご案内差し上げますので、どうぞよろしくお願いいたします。

今日はどうもありがとうございました。お二人の先生方、どうもありがとうございました（拍手)。

【了】